



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	複数を表す「たち」と「ら」の使用における選択条件 : シナリオの分析結果を中心として
Author(s)	鄭, 惠先; Jung, Hyeseon
Citation	社会言語科学, 4(1), 58-67
Issue Date	2001-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43909
Type	journal article
File Information	shakaigengo_4.pdf



研究論文

複数を表す「たち」と「ら」の使用における選択条件

— シナリオの分析結果を中心として —

鄭 惠先 (大阪府立大学大学院)

本研究の目的は、複数を表す接尾辞「たち」と「ら」の選択の条件を明らかにすることにある。方法としては、映画シナリオを資料とし、その中から「人称代名詞+たち」と「人称代名詞+ら」の形式を取りだして、使用実態を考察した。選択条件としては、話し手の属性による観点から「地域差」と「性差」、発話内容による観点から「聞き手包含・非包含」という項目を立てた。すなわち、地域が関東か関西か、話し手が男性か女性か、また、自称複수에聞き手を含むか含まないかを調べ、「たち」と「ら」の使用率を比較した。分析の結果、「たち」と「ら」の使用上の選択条件として、以下のことが検証された。

(1) 関西では関東に比べ、「ら」の使用率が高い。(2) 関東では、男性が女性に比べ、「ら」の使用率が高い。(3) 関東では、自称複수에聞き手を含まない文が聞き手を含む文に比べ、「ら」の使用率が高い。

キーワード：人称代名詞，地域差，性差，聞き手包含・非包含

The use of plural suffixes '-tachi' and '-ra': Based on the analysis result of the scenarios

Hyeseon JUNG (Osaka Prefecture University)

The purpose of this research is to clarify the use of the plural suffixes '-tachi' and '-ra'. One's choice will depend on area (geographical location), sex, and listeners' participation.

The following three were verified as a result of the analysis: (1) '-ra' is used more in the western area 'Kansai' than the eastern area 'Kanto'; (2) In the eastern area 'Kanto', '-ra' is used more by men than women; (3) In the eastern area 'Kanto', '-ra' is used more frequently when one isn't including the listener in the first person plural.

Key Words: personal pronoun, area, sex, listeners' participation

1. はじめに

本研究の目的は、複数形接尾辞「たち」と「ら」について、発話にかかわる様々な条件、すなわち、地域、性別、聞き手との関係などと照らし合わせることによって、両者の使い分けに関与する要因を明らかにすることである。

日本語の複数形接尾辞には「たち」「ら」「がた」「ども」などがある。この中で「がた」と「ども」

は「たち」と「ら」に比べると、明瞭な特性を持つ。一般に「がた」は他の複数形接尾辞より高い敬意を含んでいるといわれ、「ども」は謙譲の意味を持つと認識されている。一方、「たち」と「ら」は「がた」「ども」に比べると敬意度において中立的な性質を持っている。

しかし、「たち」と「ら」を実際の使用場面で観察してみると、まったく同様に用いられているわけではないことがわかる。たとえば、「あたしら」「あ

んたら」などの表現に対して、違和感を持つ人もいれば、普段よく使っている人もいる。また、同じ自称代名詞であっても「ぼくら」はよく使われており、「わたしら」はそれほど使われていない。本稿では、このような「たち」と「ら」の相違に注目し、両者の使い分けの条件を検証していく。

複数形接尾辞に関する先行研究としては、森田良行(1980)や佐竹秀雄(1999)などで、「たち」と「ら」の待遇差、両者の入れ換えの問題点などについて触れている。しかし、話し手の属性や発話内容とかかわって、使い分けの条件についての本格的な分析を行った論考はまったくないといっても過言ではない。

今回の調査では「たち」と「ら」が人称代名詞につく場合に限って考察を行う。これは、人称代名詞が他の名詞と異なって、指示対象の数的情報の指定を受けているからである¹⁾。たとえば、「子供」という名詞は、一人の子供でも複数の子供でも表すことができるが、「あなた」という人称代名詞は一人の「あなた」を表すだけであり、複数を表すためには「あなたたち」という形式が必要となる。このように、人称代名詞は常に単数性を持つ形態と複数性を持つ形態が対称的に存在しているのである。

ただし、今回は調査対象から他称代名詞の複数形を除外した。その理由は、他称代名詞には「彼ら」「あいつら」「やつら」など、「たち」と「ら」に於いての選択可能性がない形式が多いからである。

2. 分析の方法

2.1 分析の対象

今回の調査では、1990年から1999年にかけて映画化されたシナリオの中から53作品を選んでデータとして使用した²⁾。

映画シナリオをデータとして選んだのは、現実社会の言語現象を考察するために、自然会話に近い大量のデータが必要だという判断からである。もちろん、シナリオでのことばづかいと現実社会でのことばづかいがまったく一致するとは限らない。しかし、現実社会を反映しやすい映画シナリオは、「近似的

かつ間接的な」調査の対象として有効な資料であると考えられる。

53作品の選択の基準としては、以下の三点を考慮した。

まず、シナリオの中で使われている文体を尺度にして、地域的に「関東」か「関西」のどちらかの作品を選んだ。これには、二つの理由がある。一つは、今回の調査でもっとも注目している項目が地域による差であり、とりわけ、関西での「たち」と「ら」の使用実態は特徴的であると考えられたからである。もう一つの理由は、今回取り上げた資料の中から、数量的な裏付けが可能で、明確な対比ができるのが「関東」と「関西」であったということである。分析作品の中には、その他の地域方言で発話している例もいくつかみられたが、それらの発話は採取対象から除外した。

二つ目の選択基準としては、時代的に現代の作品を選んだ。本調査は、通時的な観点は排除しており、あくまでも現代日本語の中での共時的な考察だからである。よって、大正以前を背景とした作品や、明確に時代が把握できないアニメーションなどの作品は資料として適切でないので省いた。

三つ目の選択基準としては、登場人物における年齢層や職業、人物間の関係が多様であることを考慮した。人物間の親疎関係はもちろん、性別による違いも注目している項目であるため、女性性を持つ男性などの中性的なキャラクターの人物や在日外国人の会話など、独特な発話であることを意図的に示している文は除外した。

本調査で使用している作品の一覧は本稿の最後に記す。

2.2 仮説

「たち」と「ら」の使用における選択条件を、話し手の属性と発話内容という二つの観点から考察する。

(1) 話し手の属性における選択条件

ここで取り上げる選択条件は「地域差」と「性差」である。

一般に、全国で使われる語彙といっても、地域に

よってその使用程度には差があり、複数形接尾辞「たち」と「ら」の使用実態にも差が現れると考えられる。今回の調査では、関東と関西を取り上げ、両地域での「たち」と「ら」の使用率に差があるか否かを検証する。

同様に、男性と女性とでも主として用いる語彙や文体には差がある。人称代名詞にもこのような傾向は顕著であり、男性専用の自称代名詞「ぼく」と、女性が主に用いる「わたし」を比べてみると、「ぼくら」は「ぼくたち」とともに頻繁に使われる複数形であるが、「わたしら」はそれほど使われず、「わたし」の複数形としてはほとんど「わたしたち」の形が用いられている。今回の調査では、話し手の性別によって「たち」と「ら」の使用率に差があるか否かを検証する。

(2) 発話内容における選択条件

ここでは「聞き手の包含・非包含」という選択条件について考察する。

自称代名詞の複数形は、話し手と共に聞き手が含まれる「聞き手の包含」と、聞き手が含まれない「聞き手の非包含」というふうに、その指示対象によって二つに分けることができる³⁾。日本語では、琉球方言での自称複数形が「聞き手の包含・非包含」によって使い分けられるといわれているが、複数形接尾辞とは関連がない。今回の調査では、このような聞き手包含・非包含の区別によって、「たち」と「ら」の使用率に差があるか否かを検証する。

3. 分析の結果

3.1 人称代名詞別「たち」「ら」の出現数

2.1で述べた53作品から採取された「人称代名詞+たち」と「人称代名詞+ら」の形式453例を人称代名詞別にまとめると表1ようになる。

この結果を詳しく観察すると、人称代名詞と複数形接尾辞「たち」「ら」との関係が明確になってくる。たとえば、「わし」「うち」「てめえ」には「たち」のつく例が一例もみられず、「あなた」には「ら」のつく例がまったくない。このように、人称代名詞によっては、必ずしも「たち」と「ら」の両

表1 人称代名詞別「たち」「ら」の出現数

	たち	ら	合計
おれ	73	19	92
わたし	69	3	72
ぼく	13	15	28
あたし	22	4	26
わし	0	7	7
うち	0	5	5
おまえ	32	79	111
あんた	26	19	45
きみ	24	2	26
あなた	22	0	22
てめえ	0	16	16
おたく	2	1	3
合計	283	170	453

方がつけられるわけではない。

なお、「わたし」と「おれ」の場合、「ら」がつく例がまったくないわけではないが、非常に高い比率で「たち」が使用されており、この結果からも人称代名詞の種類と複数形接尾辞「たち」「ら」が深い関連を持っていることがわかる。

図1は、「たち」「ら」と各人称代名詞がどのように共起しているのかをより明確に示すために、表1の結果を百分率のグラフにしたものである。

男性専用の自称代名詞といわれる「ぼく」と「おれ」を対比してみよう。図1の結果によれば、「ぼく」の複数形は「たち」が46%、「ら」が54%で、「ら」の使用率が若干高いのに比べ、「おれ」の複数形は、「たち」が79%、「ら」が21%であり、「ら」より「たち」のほうがよく使われている⁴⁾。

一般に「ぼく」は「わたし」よりはインフォーマルだが、かなり広い場面で用いられ、「おれ」は「ぼく」よりくだけた場面でよく用いられると認識されている⁵⁾。そして複数形接尾辞「ら」は「軽蔑・蔑視」の意を多く含んでいるといわれるが、今回の調査からみると、「おれ」より「ぼく」のほうが複

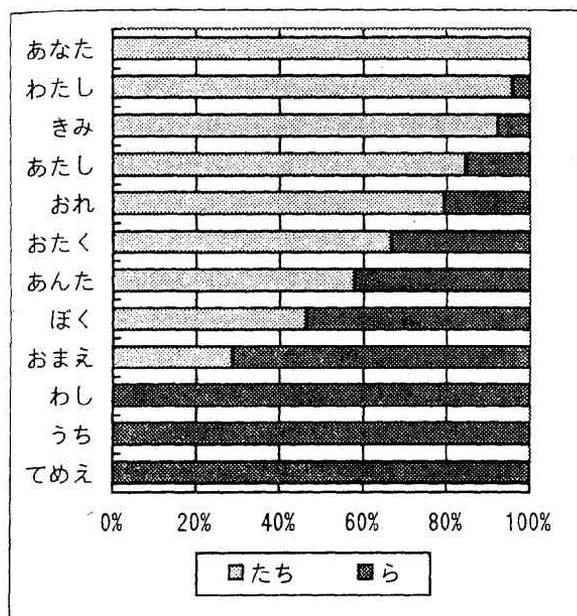


図1 人称代名詞別「たち」「ら」の出現率

数形接尾辞「ら」と共起しやすいという結果になった。このようにお互いを照らし合わせることによって、自称代名詞「ぼく」と「おれ」、複数形接尾辞「ら」に関する、今までの意識とは異なる一面をみることができる。

3.2 話し手の属性における選択条件

3.2.1 関東・関西による使い分け

この項目では、地域の違いに焦点を当て、関東と関西での「たち」と「ら」の使用率を調べた。「人称代名詞+たち」「人称代名詞+ら」の形式を含む発話の文体が関東方言であれば「関東」、関西方言であれば「関西」というふうに分けた。図2のグラフは下記の表の「たち」と「ら」の各出現数を、「関東」「関西」別に百分率として示したものである。

具体的な数値をみると、関東では「たち」の使用率が71%、「ら」の使用率が29%であるのに対し、関西では「たち」28%、「ら」72%であり、関西方言は複数形接尾辞「ら」と結びつきやすいと考えられる。この結果は、 χ^2 検定により、0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2_{(1)}=54.1, p<.001$)。

以上のことから、関東では「たち」、関西では

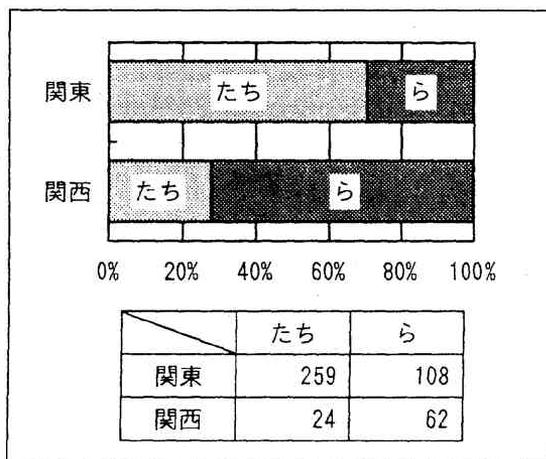


図2 関東・関西による出現率

「ら」のほうの使用率が高いということが明らかになった。

なお、図2の結果を人称代名詞別に分け、さらに詳しく考察してみよう。その詳細は表2のとおりである。

表2 関東・関西の人称代名詞別出現数

	関東		関西	
	たち	ら	たち	ら
おれ	62	7	11	12
わたし	68	2	1	1
ぼく	12	9	1	6
あたし	22	0	0	4
わし	0	0	0	7
うち	0	1	0	4
おまえ	27	64	5	15
あんた	24	8	2	11
きみ	22	1	2	1
あなた	20	0	2	0
てめえ	0	16	0	0
おたく	2	0	0	1
合計	259	108	24	62

本調査でもっとも地域による差が大きい人称代名詞は「わたし」と「おれ」である。関西では「わたしたち」と「わたしら」の使用が同数であるが、関東では「わたしたち」の使用率が圧倒的に高く、97%を占めている。「おれ」の場合も同様で、関西では「おれたち」が48%、「おれら」が52%でほぼ同数であるのに比べ、関東では「おれたち」が90%、「おれら」が10%で使用率の差が大きい。

これに関連した用例をあげると次のとおりである。

- (1) 「いいか、よく聞いてくれ、俺達はしばらく会えなくなる」 【金魚】⁹
- (2) 「ひょっとして俺らは今、ものすごいことやってんちゃうか」 【少年】

(1)は関東の例、(2)は関西の例で、両方とも同じ年頃の男子学生の発話である。登場人物の年齢や相互の関係が類似しているこの2作品だけを比べてみても地域による差は明らかであり、(1)の作品は「おれ」の複数形の4例がすべて「たち」を伴い、(2)の作品は「おれ」の複数形の8例がすべて「ら」を伴っている。

さらに、女性専用の自称代名詞である「あたし」の複数形は、関東での発話22例すべてが「あたしたち」であり、関西での発話4例すべてが「あたしら」であった。

- (3) 「ねえ、いつまでも一緒よね、あたしたち」 【二人】

- (4) 「そやけど、あたしらもね、こないしてなりはって、ほんとに良かったと思いますわ」 【素描】

(3)は関東での女子高校生の姉に対する発話で、(4)は関西での中年女性のインタビューでの発話である。つまり、関東では兄弟間でのくだけた会話の中で「たち」を用いているのに対し、関西では丁寧体と一緒に「ら」を用いているのである。このような関西での傾向は、「ら」のほうが「たち」より待遇度が低く、目下には使えるが目上には使いにくい¹⁰という意識に反する結果である。

3.2.2 男性・女性による使い分け

3.2.1での分析結果により、関東と関西での「たち」と「ら」の使用率に差が大きいことが明らかに

なった。したがって、ここからは地域を関東と関西に分けて分析を進めていく。ただし、関東での出現数367例に比べ、関西での出現数は86例にすぎなかったため、検定での信頼性を考慮し、ここでは、関東の結果を主として考察していきたい。

この項目では、総出現数を話し手の性別によって二分し、男性と女性の間での「たち」と「ら」の使用率の差を調べた。まず、関東のほうの結果を図3に示す。男性のほうは「たち」と「ら」の使用率に大きな差がないのに対して、女性のほうは「ら」より「たち」の使用率がかなり高いのがわかる。

具体的な数値としては、男性のほうが「たち」59%、「ら」41%であり、女性は「たち」93%、「ら」7%の比率である。この結果は、 χ^2 検定により、0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2_{(1)}=45.96, p<.001$)。

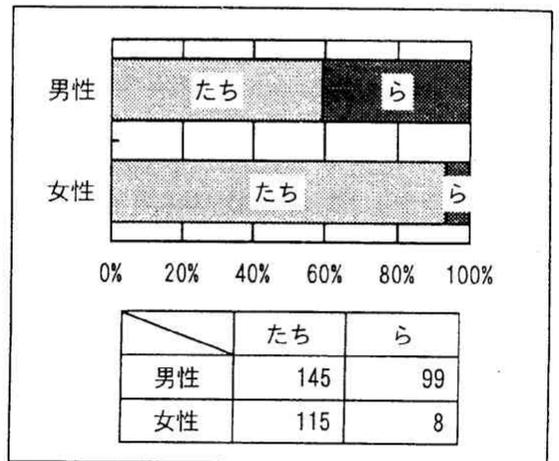


図3 男性・女性における出現率（関東）

以上のことから、関東では、男性のほうが女性に比べ、「ら」の使用率が高いということが明らかになった。

一方、関西では、男性と女性の間で「たち」と「ら」の使用率に差はみられず ($\chi^2_{(1)}=0.1, p<.75$)、男性のほうが「たち」27%、「ら」73%であり、女性は「たち」30%、「ら」70%であった。その結果を図4に示す。

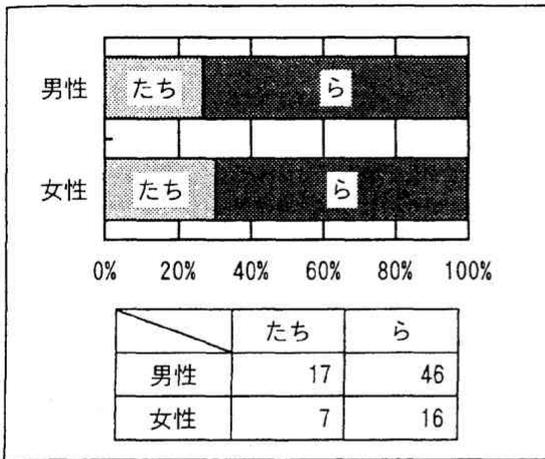


図4 男性・女性における出現率（関西）

関東に比べ、女性の「ら」の使用率が非常に高いことがわかる。

さらに、図3の関東の結果を人称代名詞別に分け、より詳細に考察してみよう。その結果は表3のとおりである。

表3 男性・女性の人称代名詞別出現数（関東）

	男性		女性	
	たち	ら	たち	ら
おれ	62	7	0	0
わたし	13	0	55	2
ぼく	12	9	0	0
あたし	0	0	22	0
うち	0	1	0	0
おまえ	27	63	0	1
あんた	6	4	19	3
きみ	22	1	0	0
あなた	1	0	19	0
てめえ	0	14	0	2
おたく	2	0	0	0
合計	145	99	115	8

表3の結果をみると、女性のほうで出現率が高い

自称代名詞は「わたし」と「あたし」であるが、これらには圧倒的に「ら」より「たち」が多用されている。ここからも女性が男性に比べ、「ら」を回避するという傾向が明らかである。

(5) 「オレらは小学校5年から。な」 【カナ】

(6) 「そのうち、今度はあたしたちが連れてってあげるよ」 【カナ】

上記の(5)と(6)は同じ作品での男女高校生の発話である。(5)の発話は、男子学生が(6)の発話者である女子学生に向かって言うセリフで、「おれら」を使っている。しかし、ここでの聞き手である女子学生は(6)のように「あたしたち」を用いている。

なお、対称代名詞の出現数を見てみると、全体として「きみ」「おまえ」「てめえ」は男性のほうで、「あなた」「あんた」は女性のほうで高い数値をみせている。その中で「きみ」を除くと、男性によってよく使われる対称代名詞の複数形には「ら」が、女性によってよく使われる対称代名詞の複数形には「たち」が主に用いられていることになる。この結果からも「たち」と「ら」の男性・女性による使用率の差は明らかである。対称代名詞に関連している用例を以下に示す。

(7) 「とぼけるなよ、責任取れよお前ら。なんだよこれ」 【病院】

(8) 「何もかもなくなって私達一生苦しみ抜いて生きていくことになんどのよ…あなたたち本当にそれ、出来る？」 【轢逃】

(7)は30歳の男性が病院に入院して相部屋になった人たちに向かって言うセリフであり、(8)は中年の主婦が自分の子供に対して言うセリフである。この用例をみても親疎関係より、話し手の性別とそれによる人称代名詞の種類が「たち」と「ら」の使用率に深くかかわっていることがわかる。

3.3 発話内容における選択条件

ここでは、「聞き手の包含・非包含による使い分け」の分析結果について述べていく。

まず、「聞き手の包含・非包含」というのは、どのような発話を指しているのか、その具体例を以下

に示す。(9)は聞き手包含の用例であり、(10)は聞き手非包含の用例である。

(9)「だけど、夫婦でしょ、わたしたち」【日柄】

(10)「あなた一人ではぼくらを説得できますか」

【12人】

(9)は夫婦の間で妻が夫に対して言うセリフであり、(10)は陪審員になった人たちが決を取る場面で、意見が唯一異なる一人の男性に向かっての発話である。

この項目では、上例のように自称代名詞の複数形が表す指示対象に、話し手と共に聞き手が含まれているか否かを調べた。

ただし、この条件は3.2の「話し手の属性における選択条件」とは異なって、一人の話し手の中での選択条件である。よって、この項目では、話し手の属性を「関東」と「関西」の「男性」に限定した。

表4は「関東の男性」の分析結果である。

表4 聞き手包含・非包含の人称代名詞別出現数 (関東・男性)

	包含		非包含	
	たち	ら	たち	ら
おれ	32	1	30	6
ぼく	7	1	5	8
わたし	6	0	7	0
うち	0	0	0	1
合計	45	2	42	15

この中から、「たち」と「ら」の対応がまったくみられなかった「わたし」と「うち」は、「発話内容における選択条件」を考察するには不適切であると判断して分析対象から省き、「おれ」と「ぼく」の出現数だけをもとに分析を行った。その結果が図5である。

この結果からみると、「聞き手の包含・非包含」によって、「たち」と「ら」の使用率には差がみられた。具体的な数値としては、聞き手包含の文では「たち」95%、「ら」5%であるのに対し、非包含の文では「たち」70%、「ら」30%であり、 χ^2 検定に

より、1%水準で有意差が認められた ($\chi^2_{(1)}=7.029$, $p<.010$)⁸⁾。

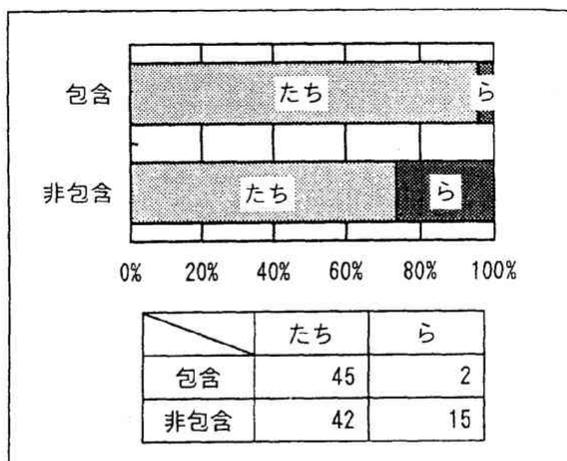


図5 包含・非包含による出現率 (関東)

以上のことから、関東では、「聞き手包含」の発話より「聞き手非包含」の発話のほうで「ら」が使われやすいということが明らかになった。

一方、関西では、聞き手包含の場合が「たち」50%、「ら」50%で、聞き手非包含の場合は「たち」29%、「ら」71%であり、百分率の差はみられたものの、 χ^2 検定による有意差は認められなかった ($\chi^2_{(1)}=0.675$, $p<.50$)。これは、全出現数の数量的不足に影響されたものと考えられる。図6が関西のほうの分析結果である。

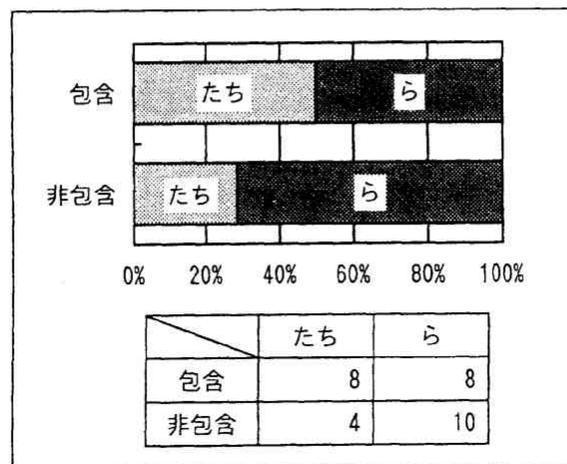


図6 包含・非包含による出現率 (関西)

この項目に関連している用例を以下に示す。

- (11) 「でもそれは俺達があくまでも避けて通った場合の話…」 【素描】
 (12) 「で、俺達にしか見えない世界、俺達にしか分からない感覚っていうのかな。…」 【素描】
 (13) 「夏になるとね、ま、俺らがゲイビーチと呼んでいる特定の場所があって、…体焼きに行ったりするんですけど、…」 【素描】
 (14) 「ま、僕等もそこでね、…出会いを求めたりしてます」 【素描】

上記の4例の中で、前者の2例は聞き手を含み、後者の2例は聞き手を含まない。(11)と(12)は登場人物の間で、お互い共有している問題について話す場面であり、(13)と(14)は監督とのインタビュー場面である。これはすべて一人の男性の発話で、この作品はドキュメンタリー形式の映画であるため、決められたセリフはない。つまり、この発話者の場合、「聞き手の包含・非包含」によって「たち」と「ら」を非常にきれいに使い分けていることになる。

4. 結論

以上、映画シナリオを資料として、人称代名詞につく複数形接尾辞「たち」と「ら」の使用上の選択条件について考察した。話し手の属性による条件として「地域差」と「性差」、発話内容による条件として「聞き手の包含・非包含」という三項目の仮説を立てて分析を行った結果、これらの条件が「たち」と「ら」の使用率と関連を持っていることが検証された。その内容をまとめると以下のようである。

話し手の属性と関連して、

- (1) 「関東」では「たち」、「関西」では「ら」の使用率が高い。
 (2) 関東では、「女性」に比べ「男性」の「ら」の使用率が高い。

発話内容と関連して、

- (3) 関東では、「聞き手包含」の文に比べ「聞き手非包含」の文で「ら」が使われやすい。
 とりわけ、「関東・関西による使い分け」は選択

条件の中でもっとも強い条件となっている。これは、もう一つの話し手の属性である「男性・女性による使い分け」の分析結果からも予想できる。

ただし、1. で述べたように、本調査はあくまでも近似的な調査である。そのため、この結論については、今回の調査結果にとどまらず、今後も幅広い分析方法で検証しつづけていく必要があると考えられる。たとえば、自然談話やアンケート調査による分析などである。今回は、大量データの収集の困難さや被験者の意識による作為可能性などを考慮し、これらの方法は採用しなかったが、今後は、このような問題点を改善していく上で、より積極的に多様な分析方法を取り入れていきたいと考える。

なお、もう一つの課題として、「聞き手の包含・非包含」という条件の裏面に隠されている話し手の意識にも注目したい。聞き手を含むか含まないかは、話し手の聞き手に対する仲間意識に基づいて形成され、表面化された結果であると思われる。言い換えれば、必ずしも聞き手を含まなくても話し手の意図によっては「たち」と「ら」の条件に流動性が生じるということである⁹⁾。よって、今後はこのような会話の中に含まれている意識・意図までを深層的に考察し、さらに徹底的な分析を行う必要があると考えられる。

注

- 1) 仁田義雄(1997)では、人称代名詞と他名詞の数概念の表示の違いについて、“人称代名詞は、それ以外の名詞と異なって、既に不可避的に〈数〉の指定を帯びて存在している。…日本語名詞の、数概念の表示のあり方・指示対象の数的異なりに対する感応のし方に対して、【人称代名詞>その他の名詞】といった階層関係の存在が、観察される。”と述べられている。p.114
 2) シナリオ作家協会(編)『年鑑代表シナリオ集』(映人社)。1990年版より1999年版までの10冊を資料とし、収録されている100作品の内、53作品を使用した。
 3) これに関連して、亀井孝 他(編)(1996)では、“一人称複数を具体的には三つの種類に分けることが出来る。それは、「1, 2⁽⁺⁾, 3⁽⁺⁾」(この形式をIaと呼ぶ)、「1, 2⁽⁺⁾」(Ib)、「1, 3⁽⁺⁾」(Ic)である。

この場合、I a と I b を包括的一人称複数 (inclusive 'we'), I c を除外的一人称複数 (exclusive 'we') と呼んで区別する。この二つの一人称複数の違いはその名称が表すように、一人称のグループに「聞き手 (=2⁽⁺⁾) を含めるか否か」にある。」と述べられている。p.726

- 4) 本文中で明記している百分率は、小数点以下を四捨五入している。
- 5) 小林美恵子 (1997) p.126
- 6) 用例の出典を略号で表している。各略号の作品名は作品一覧のところに記している。
- 7) 佐竹秀雄 (1999) p.21
- 8) この検定では、セル内に5以下の度数があったため、イェーツの補正を行った。関西のほうの分析結果も同様である。
- 9) 宮城信勇 (1989) では、八重山方言の中での「聞き手の包含・非包含」による区別について、「地元への観光客誘致のキャッチフレーズに「オーリトリーバガーシマカイ」(おいで下さい 私たちの島へ) というのがある。原則から言えば、この呼びかけを聞いている人も同じ仲間、八重山の人でなければならない。…しかしながら、このとき島外からの観光客をも話し手・八重山の人が自分の中間として、われわれの中に包みこんでしまっているからである。」ということが指摘されている。p.381

作品一覧

- 「宇宙の法則」, 井筒和幸, 1990
 「さわこの恋」, 斎藤博, 1990
 「バタアシ金魚」, 松岡錠司, 1990 **【金魚】**
 「病院へ行こう」, 一色伸幸, 1990 **【病院】**
 「おもひでぼろぼろ」, 高畑勲, 1991
 「12人の優しい日本人」, 三谷幸喜, 1991 **【12人】**
 「大誘拐/RAINBOW KIDS」, 岡本喜八, 1991
 「ふたり」, 桂千穂, 1991 **【二人】**
 「らせんの素描」, 小島康史, 1991 **【素描】**
 「ありふれた愛に関する調査」, 荒井晴彦, 1992
 「おこげ OKOGE」, 中島丈博, 1992
 「きらきらひかる」, 松岡錠司, 1992
 「シコふんじゃった」, 周防正行, 1992
 「お引越し」奥寺佐渡子・小此木聡, 1993
 「ゲンセンカン主人」, 石井輝男, 1993
 「月はどっちに出ている」, 崔洋一・鄭義信, 1993
 「ひき逃げファミリー」, 水谷俊之・砂本量, 1993 **【轍逃】**
 「病院で死ぬということ」, 市川準, 1993
 「居酒屋ゆうれい」, 田中陽造, 1994
 「119」, 筒井ともみ 他, 1994

- 「ヌードの夜」, 石井隆, 1994
 「800 TWO LAP RUNNERS」, 加藤正人, 1994
 「棒の哀しみ」, 神代辰巳・伊藤秀裕, 1994
 「あした」, 桂千穂, 1995
 「学校の怪談」, 奥寺佐渡子, 1995
 「カナカナ」, 大嶋拓, 1995 **【カナ】**
 「KAMIKAZE TAXI」, 原田真人, 1995
 「渚のシンドバッド」, 橋口亮輔, 1995
 「Love Letter」, 岩井俊二, 1995
 「お日柄もよく ご愁傷さま」, 布勢博一, 1996 **【日柄】**
 「岸和田少年愚連隊」, 鄭義信, 1996 **【少年】**
 「キッズ・リターン」, 北野武, 1996
 「Shall we ダンス?」, 周防正行, 1996
 「新・居酒屋ゆうれい」, 田中陽造, 1996
 「MIDORI」, 斎藤久志・小川智子, 1996
 「〔Focus〕」, 新和男, 1996
 「ロマンス」, 長崎俊一, 1996
 「うなぎ」, 富川元文 他, 1997
 「鬼火」, 森岡利行, 1997
 「傷だらけの天使」, 丸山昇一, 1997
 「夏時間の大人たち」, 中島哲也, 1997
 「ポストマン・ブルース」, サブ, 1997
 「愛を乞う人」, 鄭義信, 1998
 「一生遊んで暮らしたい」, 我妻正義, 1998
 「学校Ⅲ」, 山田洋次・朝間義隆, 1998
 「絆一きずな」, 荒井晴彦, 1998
 「フレンチドレッシング」, 斎藤久志, 1998
 「大阪物語」, 犬童一心, 1999
 「あ、春」, 中島丈博, 1999
 「ユキユ〜貝殻」, 山田耕大, 1999
 「刑法第三十九条」, 大森寿美男, 1999
 「学校の怪談4」, 奥寺佐渡子, 1999
 「皆月」, 荒井晴彦, 1999

参考文献

- 伊豆山敦子 1992 琉球方言の1人称代名詞 国語学, 171, 124-106 ((1) - (19)).
 大橋勝男 1999 方言地理学と日本語史—対称代名詞から見た待遇表現史—日本語学, Vol.18-5, 4-17.
 荻野綱男 1997 敬語の現在—1997 言語, Vol.26-6, 20-30.
 金丸美美 1993 人称代名詞・呼称 日本語学, Vol.12-5, 109-117.
 亀井 孝 他 (編) 1996 言語学大事典 第6巻 術語編 三省堂
 小林美恵子 1997 自称・対称は中性化するか 現代日本語研究会 (編) 女性のことば・職場編 ひつじ

鄭惠先：複数を表す「たち」と「ら」の使用における選択条件

- 書房 Pp.113-137.
- 佐竹秀雄 1999 複数を示す「ら」日本語学, Vol.18-14, 19-22.
- 鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波書店
- 田窪行則 1992 言語行動と視点—人称代名詞を中心に—日本語学, Vol.11-8, 20-27.
- 仁田義雄 1997 日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して ころしお出版
- 野元菊雄 1978 日本語の性と数 言語, Vol.6-7, 14-19.
- 文化庁(編) 1979 「ことば」シリーズ11 言葉に関する問答集5 大蔵省印刷局
- 宮城信勇 1989 八重山方言の「わたしたち」「わが家」の二つの表現 沖縄文化協会(編) 沖縄文化—沖縄文化協会創設40周年記念誌—ロマン書房 Pp.37-5-383.
- 森田良行 1980 基礎日本語2 角川書店
- れいのるず・秋葉かつえ 1997 言語と性差の研究—現在と将来—井出祥子(編) 女性語の世界 明治書院 Pp.199-216.
- 吉岡泰夫 1997 敬語行動と規範意識の地域差 言語, Vol.26-6, 58-65.

(2000年9月1日受付)

(2001年4月13日修正版受付)

(2001年5月9日掲載決定)